

〈共同研究報告〉

都市化する郡山上町

——人口増加の内容

高橋 美由紀

本報告は、社会経済史学会第六回全国大会パネルセッション「近世奥羽地方の人口と家族」での「郡山上町の都市化—人口増加はなぜ生じたのか—」（一九九七年五月三十一日、東北大学）および、日本人口学会関東・東北部会（一九九七年一月一日、東北学院大学）における「近世地方都市の人口」の報告をもとに、発展させまとめたものである。

1 目的

近世日本の都市について、例外はあるものの大都市や城下町の人口は一七〇〇年以前には増加したが、それ以降は停滞したといわれる。この停滞の要因について、T・

C・スミスは、「城下町の衰退と在郷町の成長という人口メカニズムについてはあまり知られていないが、両者の間に人口の移動があつたことははっきりしている⁽¹⁾」と述べ、城下町人口の停滞、もしくは衰退の理由の一つは「在郷町⁽²⁾」の経済活動の増大とそれに伴う人口増加であると示唆している⁽³⁾。では、在郷町では本当にこのような人口の増加が生じていたのか。本論文では、この実態を人口の自然増加と社会増加とに分けて観察する。

この観察の意義は、第一には近世の都市人口の実態把握であり、第二には近世の都市に関する「都市蟻地獄説」および「プロ

ト工業化」の検証である。

近世日本の都市人口に関して、何名かの研究者による分析はある。しかし、多くは江戸・大坂といった大都市、もしくは城下町に関する研究であり、在郷町についての研究はまだ充分とはいえない⁽⁴⁾。また、都市のミクロレベルでの史料から調査された人口に関する研究も少ない⁽⁵⁾。このような状況から、在郷町の人口を「宗門帳」や「人別帳」などの一次史料を用いてミクロレベルから実証的に分析することは、近世都市の実態を明らかにする上で大きな意義があるといえる。

第二の点に関して触れたい。近世日本の

都市人口の特徴として、「都市蟻地獄説」

が速水によって指摘されている。⁽⁶⁾これは、

西欧においても見られる現象である。都市

では、粗死亡率が粗出生率より高いので、

人口の自然増加率がマイナスとなる。この

ため、周辺農村などからの流入人口によっ

てその人口数を維持しているというもので

ある。⁽⁷⁾この説について斎藤は、自然増加率

に関しては、粗死亡率ばかりでなく粗出生

率にも目を向けなければいけない、と言及

している。⁽⁸⁾つまり、粗出生率が他地域に比

べて低かった場合の理由として、都市にお

ける性比のアンバランスや結婚のしにくさ

による独身率の問題などを考慮する必要が

ある。この点に関し、A・シャーンは、

都市定住者と流入者との人口的な行動が

異なることを指摘し、「都市は流入者がい

なければ衰退することはなかった」と逆説

的に述べている。⁽⁹⁾

次に検証したい説は「プロト工業化」に

関連するものである。プロト工業化とは、

本格的な工業化以前に生じた農村（在郷

町）の工業化のことである。西欧では、

「プロト工業化↓結婚年齢の低下↓出生率

上昇↓人口増加」というプロセスが見られ

た。近世日本においては、出生率の上昇傾

向はみられるが、これは「結婚年齢の低

下」を介したのではないといわれる。⁽¹⁰⁾今

回の分析で対象とする二本松藩領の郡山上

町においては、近世に経済的発展が見られ、

これに伴い人口が増加する。これはどのよ

うな過程を経て生じたのか。さらに、大都

市や城下町の停滞と在郷町の発展に関し、

「プロト工業化は都市化の停滞をもたら

した」といわれるが、郡山上町の経済発展

が、城下町二本松の経済発展の力を奪い取

るような方向に作用したのだろうか。

2 近世都市

ある地域は何をもって「都市」といえる

だろうか。一般に、都市の要素として、(1)

人口規模が大きい、人口密度が高い、人口

の移動が頻繁である、(2)城下町・門前町・

港町・（在郷町）として成立、(3)行政上の

位置づけが「町方」である、(4)産業の中心
が農林水産業ではなく商工業であること、
などが考えられる。

このような点から郡山上町を見た場合、

「都市」と考えられるだろうか。現住総人

口は、享保一四年（一七二九）に七九四人、

明治三年（一八七〇）に二六一四人である。

ここでは考察を郡山上町に限ったが、在郷

町郡山のもう片方の郡山下町を加えると、

天明二年（一七八二）の人口は二六五六人、

慶応三年（一八六七）の人口は五二〇五人

である。⁽¹⁴⁾この数は二本松藩の延宝五年（一

六七七）〜天保一一年（一八四〇）の領内

人口戸数調べによる平均人口が約七万人で

前後していたことを考えると、その約四

〜七%にあたる。また、享和元年（一八〇

一）の郡山組一四カ村の人口が七九四九人

であり、⁽¹⁶⁾同年の郡山上町の人口が七一

〇人、⁽¹⁷⁾寛政一二年（一八〇〇）の郡山下町

の人口が一〇二五人であることを考えると、⁽¹⁸⁾

郡山組全体の約三四%にあたる。城下町、

二本松（六町）⁽¹⁹⁾の天明八年（一七八八）の

人口は三一一人であり、郡山は城下町六町とさほど変わらない人口水準であったと考えられる。さらに、郡山上町と郡山下町の後期の合計人口は約五千人となり、郡山は十分に中小都市といえよう。⁽²¹⁾

郡山は宿場町であったことから、人々の往来は激しかった。郡山には、二本松藩のみならず他領からも多くの人々がさまざまな理由で流入し、また流出していた。

町の成立および行政区分に関して、次に述べる。郡山は村として成立したが、文政七年間に町場昇格運動をはじめ、文政七年(一八二四)に町方として認められるようになった。もっとも、「郡山村上町」と呼ばれていた最初の時期においても、その機能は宿場の要素が濃く、純農村ではなかった。そして、町場昇格に伴い、旧村役人も、名主↓町検断、検断↓道筋検断、組頭・目付↓町目付、長百姓↓長町人と変化し、さらに旧村役人の上に郡山全体の町役人として、町年寄という役職が新たに設置された。⁽²²⁾

郡山では、「苗字御免の大商人が、旅籠

屋・質屋・酒造業を営み、また生糸・呉服を扱う商人として数十人にも及ぶ下人を抱えて」いた⁽²³⁾というように、産業としては、農業的色彩もなくはないが、宿場町としての商業的色彩のほうがより強かった。そして、定期的に六斎市などの市も開かれ、安積郡の中心的な経済取引の場として栄えていた。

3 実証

3-1 史料とデータ

今回の分析で使用するのは、「郡山(村)上町人別改帳」(郡山市歴史資料館所蔵「今泉文書」)⁽²⁴⁾である。史料は、元禄元年(一六八八)〜明治三年(一八七〇)まで残存しているが、ここではそのうち史料が続いて残存する享保一四年(一七二九)〜明治三年(一八七〇)を中心に扱う。人別帳の記載は世帯ごとになっており、現住人口(「内書」と呼ぶ)のみならず、現住人口の人数を縮めた後に、一段低い位置に、非現住人口(「外書」と呼ぶ)も記載されている

(図1)。

郡山上町は、陸奥国二本松藩に属する(図2)⁽²⁵⁾。二本松藩は安積郡(四一カ村)・安達郡(六九カ村)から成り、安積郡には、郡山組・大槻組・片平組の三組があった。

郡山組は、郡山・久保田・福原・日和田・梅沢・日出山・笹原・小原田・八山田・横塚・高倉・八丁目・荒井・笹川の一四カ村から成っていた。⁽²⁷⁾そして、郡山は行政上の

年貢負担単位として上町と下町とに分かれており、名主がそれぞれ別に存在した。中心史料の人別帳が上町と下町とに分かれて残されていることから、今回の実証分析は上町に関するものとなる。しかしながら、上町と下町は社会的状況の同質性が高く、一つの地域としてとらえた方が適切な場合も多い。以下、両町に共通の問題について述べる場合には、単に「郡山」とのみ記す。

3-2 人口増加

二本松藩全体での人口は、宝暦の飢饉(二七五―五六)、天明の飢饉(二七八―

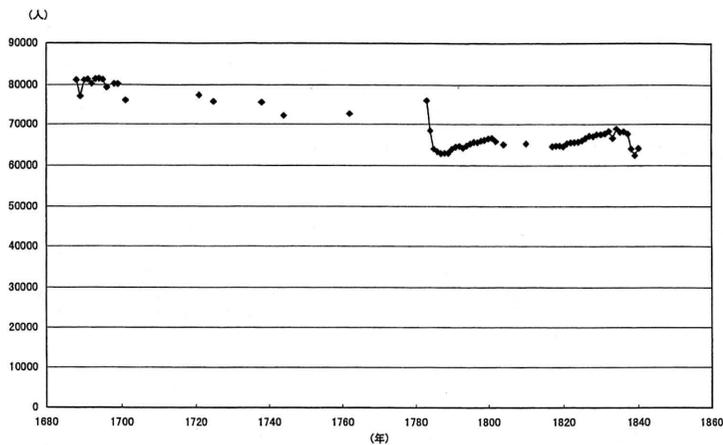


図3 二本松藩領内人口（二本松市編〔1982〕、延宝5年～天保11年領内人口戸数調より作成）

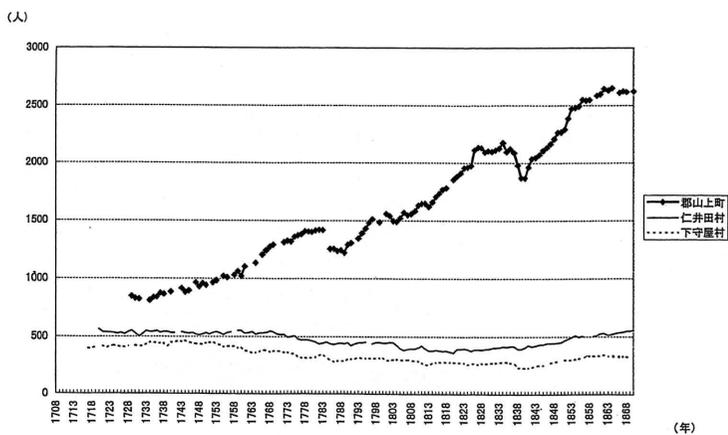


図4 人口趨勢

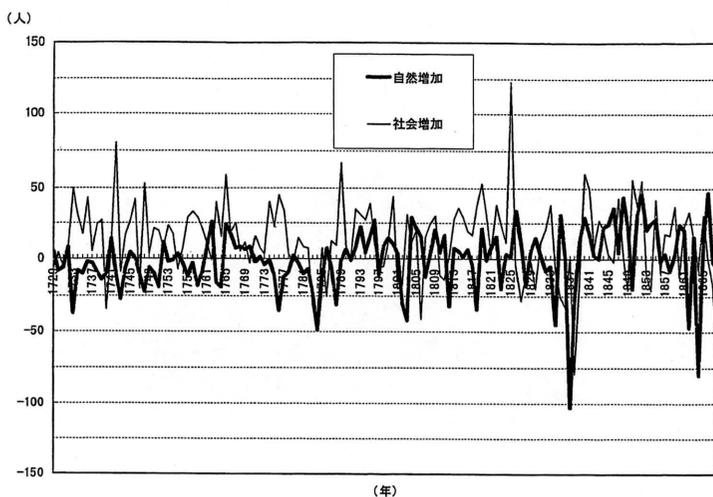


図5 人口増加

人などを加えた人口合計とが書き上げられている。しかしながら、郡山が宿場町として繁栄していたことを考えると、このような定住人口以外にも、旅行者などの一定期間滞在者、人別帳には載らない短期間の奉

公人や他地域からの通い奉公人などが常に存在していたと考えられる。今回の分析で扱うのは実際にこの地域に一定期間住んでおり、人別帳に記載される「現住人口」、現在風に言うのであれば、住

民票が存在する人々である。史料上は「定有人」ということになる。これにこの地域に家族とともに居住しているが、身分が高くなったために人別帳上に他の人々と同一書式では記載されなくなる人々を加えた数

対象人口の趨勢に関して、人口増加への正の寄与は、自然増加によるものより、社会増加によるものの方が高い(図5)。時系列的に観察した場合、初期に負の寄与をしていた自然増加が正の寄与に変わり、

値を扱う。⁽³⁰⁾

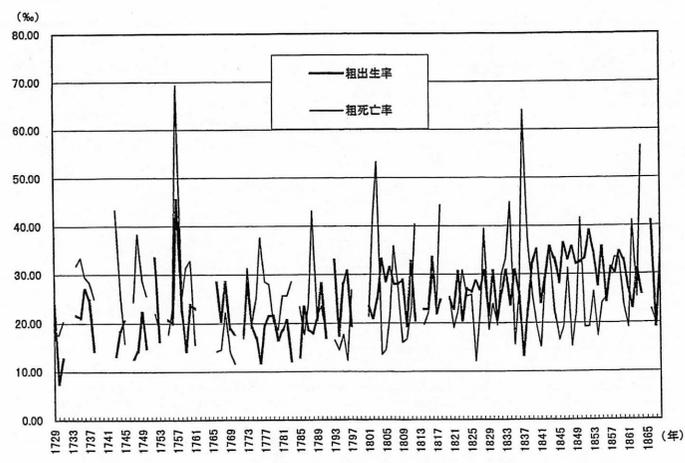


図6 粗出生率と粗死亡率 (1729~1865)

社会増加は常に正の寄与をしていることから、後半の人口増加を加速させたといえる。自然増加の変化の内容は、観測年間に粗出生率・粗死亡率とともに上昇傾向にあるが、粗出生率の方が急勾配を描いているので、自然増加率はマイナスからプラスに変

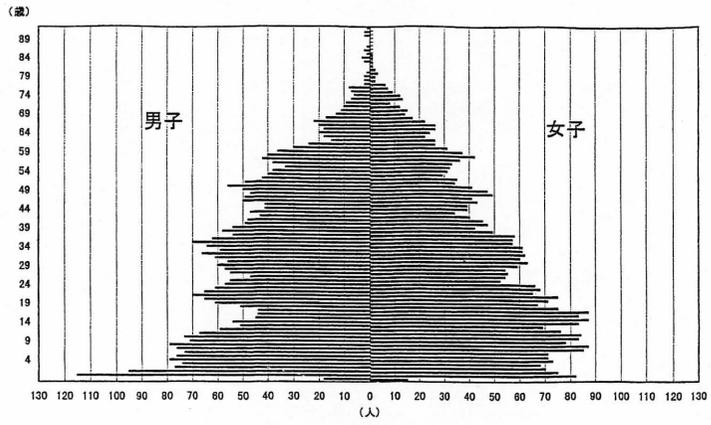


図7-a 年齢別人口構成 (1801~1855)

わり、観察期間の後半には人口増加に貢献している(図6)。この傾向は周辺農村の下守屋村・仁井田村とも共通する。都市では、その独身率の高さから、一般に粗出生率は低いと考えられる。粗出生率という数値が、ある地域の一年間の出生数

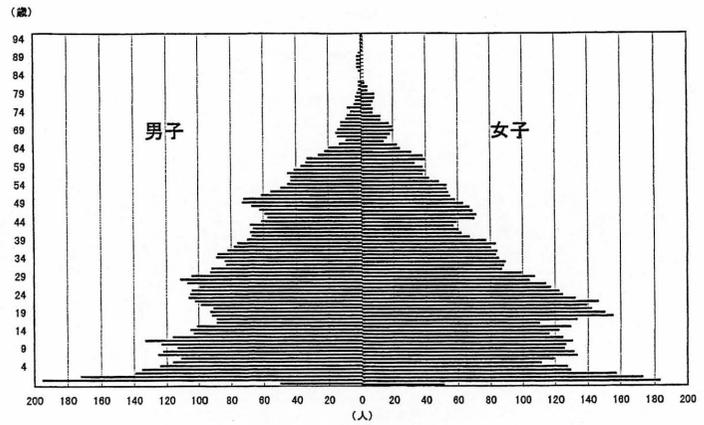


図7-b 年齢別人口構成 (1851~1855)

をその地域の年央人口で除したものであることを考えれば、単身者の割合が高ければ粗出生率が低くなるのは当然のことである。では、郡山上町の実態はどのようなものであった

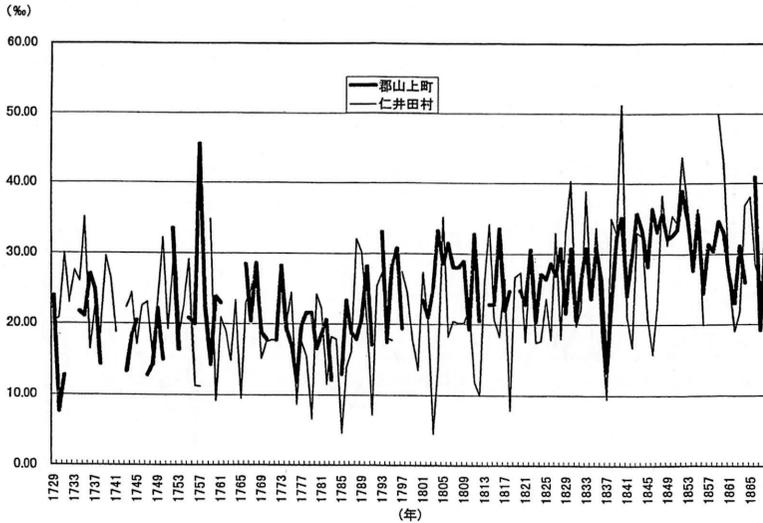


図8 粗出生率の比較

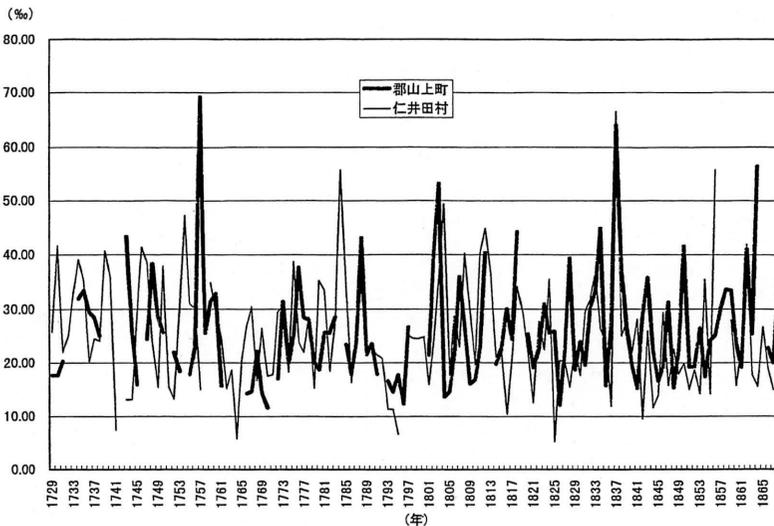


図9 粗死亡率の比較

のか。郡山はその都市的性格から奉公人の占める割合が高い。しかし、郡山上町の奉公人の中には、人別帳上は雇用主の家に単身で

記載されているが、同町内にその家族が「店借」で居住している者もいる。すなわち、史料上は雇用主のほうに記載されているが、実際には家族と過ごしていた時間も長かったと考えられる。このような場合には、史料上の単身奉公人の多さが直接に低出生率には結びつかないだろう。また、通い奉公や、すぐに家族のもとへ戻れる、近隣への奉公の場合も同様である。

さらに、郡山上町の年齢別人口構成を描いてみると、生産年齢人口が突出した「都市型」ではない(図7-a, 7-b)。つまり、郡山上町では経済的には商業が中心となり、多くの奉公人を雇うような家も出てきはあるが、奉公人の中には家族とともにこの地域に、店借や引越として流入する者もある。このような「都市」の場合には、粗出生率は低下しない(図8)。

また、粗死亡率も前出の仁井田村

と比べてみた場合、高いとはいえない(図9)。すなわち自然増加率に関していえば、農村的要素が濃く、大都市においていわれるような、自然増加率が常にマイナスになる

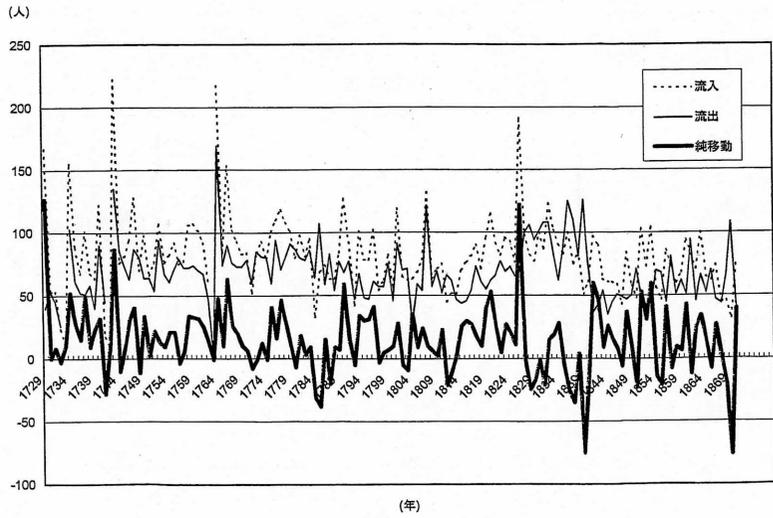


図10 流入・流出・純移動

表1 郡山上町への地域別移動(1729~1870)(50件以上の移動があった郡)

国名	郡名	流入	流出	純移動
陸奥	安積郡	5354	5102	252
	安達郡	557	674	-117
	田村郡	407	283	124
	信夫郡	234	150	84
	岩瀬郡	225	84	141
	伊達郡	200	91	109
	会津郡	75	20	55
	白河郡	68	29	39
	その他	255	61	194
	不明	1	0	1
陸奥計		7376	6494	882
越後	蒲原郡	3441	1180	2261
	その他	47	22	25
	不明	91	11	80
越後計		3579	1213	2366
その他		178	60	118
不明		494	1844	-1350
総計		11627	9611	2016

*郡山上町から流出し、同一理由で流入したものは含まない。

るといような状況ではなかった。そして、宿場町郡山の自然増加率は、観測期間後半においては正となる。

しかし、そのような自然増加にもまして地域人口を増加させたのは、他地域からの流入であった。そこで、次にこの流入人口について見てみる。

い(表1、図11)。いま、流入元を、郡山を含む陸奥国安積郡と越後国蒲原郡とで比較してみると、図12のようになる。一七七〇年あたりまでは、周辺地域からの流入が圧倒的に多かった。しかし、一七五〇年頃から、越後国からの流入者が漸増し、一八〇〇年代になると周辺地域からの流入を上回

3-4 社会増加
3-4-1 流入地域
郡山の流出人口を時系列的に見た場合、ほとんどの年で流入人口が流出人口を同程度上回り、郡山の人口増加の要因となっている(図10)。地域別に見ると、流入地域では安積郡内の近隣農村、特に郡山組などからの流入が多いが、純移動をとると、越後国からが多

る年も出てくるようになる。この越後国からの流入者の出身地域は主として越後国蒲原郡である。近世の終わりには周辺地域からの流入よりも、越後国蒲原郡からの流入のほうが多くなったのである。

このように、越後国からの流入が、安積郡内など周辺農村からの流入を上回るようになった背景にはどのような事情があったのだろうか。まず、考えられることは近隣

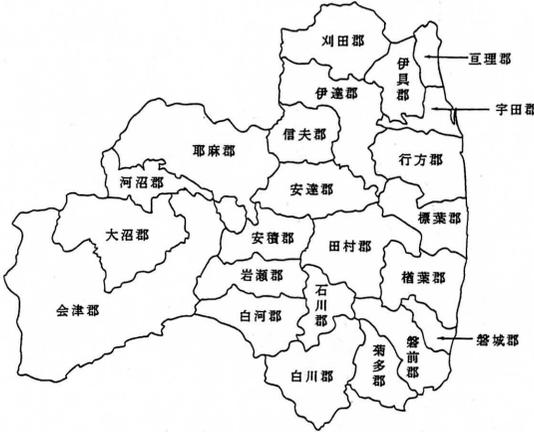


図11 安積郡周辺の郡名

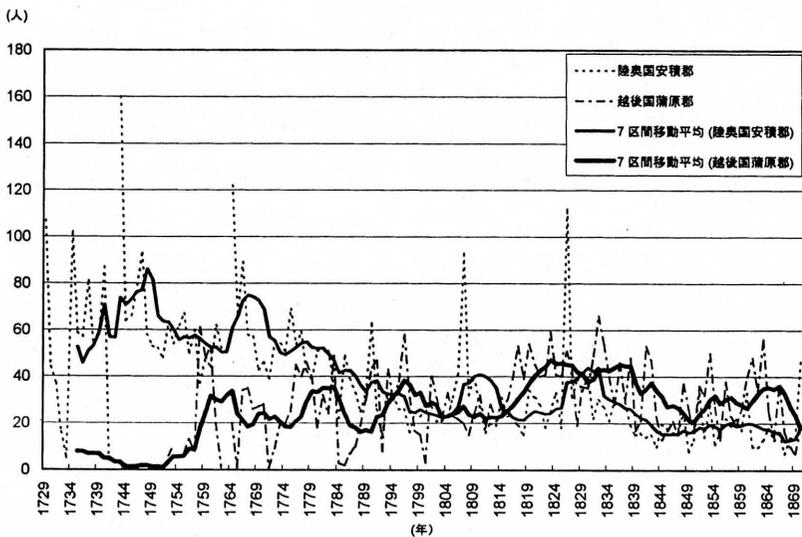


図12 郡山上町への流入件数 (1729~1870、陸奥国安積郡・越後国蒲原郡)

農村の経済状態が向上したことである。近隣農村で、郡山に出てこなくても十分に生活が営めるようになった。一方、労働力を必要とする郡山がより遠方の地域からの流

入者を引きつけた、ということが考えられる。もっとも、越後国からの流入者が増加したために、周辺農村からの流入者が減少した可能性もあり、このあたりの因果関係については、今後の研究課題である。

さらに、成松の安積郡下守屋村・安達郡仁井田村の研究によれば、これらの村では天明の飢饉期以降、それぞれの村の人口は一九世紀後半になっても一八世紀初頭の水準まで回復しておらず、また二本松藩領全域の人口推移を見ても、その回復は一八世紀中にはなかつたので、周辺農村から郡山へ移動する人口自体が少なくなつたことも考えられる。

『郡山の歴史』には、「郡山は安積地方の商業の中心地であつたので、店借³⁾といつて他村から大工・左官・桶屋・石工などの職人が多く集まつてきた。また、天明・天保の凶作の時には、一人の餓死者も出さず、他の町村が著しく人口が減少したのに、

郡山は付近の村から人々が集まってきたため、逆に増加した」とある。³²⁾

また、近隣農村の一つの下守屋村では、「郡山は平均してどの年代にも多く、安定した雇用先であり、「郡山は宿場町としてばかりでなく、商業都市としても目覚ましい発展を遂げつつあった」ので、「この村からも郡山への労働力提供はとくに一八世紀半ばから伸びており、とりわけ女子の奉公が目立って増加をみせている」³³⁾が、一九世紀になるとこの村からの出稼ぎ奉公人の数は減少し、それに伴って村の人口は増加したのである。

ところで、越後国蒲原郡からの流入人口の急増という現象は、郡山上町に限ったことではない。たとえば、郡山の北部に位置する仁井田村では、「婚姻による移入の中でもっとも件数が多い越後（主に蒲原郡）出身者は、初期には全くといってよいほど事例がなかったのが、一七〇〇年代の半ばから登場しはじめ、一八〇〇年代中ごろにかけて増加する傾向にあった。一方的な移

入に限られる点ではほかの農村と異なっているが、越後国から直接迎えられたのか、あるいは郡山や本宮方面に出稼ぎに来ていたものと呼びとったのかは明らかでない。³⁴⁾この村でも郡山と同様、越後国蒲原郡出身者が多く流入している事実がある。

郡山での越後国出身者の増加について成松は、文政六年（一八二二）の郡山上町に居住する奉公人に占める越後国出身者の比率の高さと越後国からの引越人の増加に言及し、このことが郡山上町の人口が増大する要因となったと結んでいる。³⁵⁾

郡山以外の宿場町にも越後国からの奉公人が多く来ていた。関東各地の宿場には、越後国の蒲原地方出身の女性が、女中奉公人として身を沈めた例も多く、「食売女³⁶⁾に限ってみると、全体の七割以上が越後国蒲原郡出身者によってしめられている」³⁷⁾。

では、このような人口流出地域となっていた越後国の状況はどのようなものであったのか。残念ながら蒲原郡の事例ではないが、越後国からの人口流出には以下のような

な例がある。

「新潟県史³⁸⁾」によれば、（蒲原郡）「角田浜村³⁹⁾」では、「嘉永期から安政期にかけての数年間に限ってみても、多くの者が早春二月ころから、年の暮にかけて、（江戸・水戸などの）異郷の地に出稼ぎしていた」。

また、「耕地の乏しい海岸村の村人が、木挽・大工などの職人として、不漁の年には、多くの村人を巻き込んで異郷へ旅立ち、職人で村に残る者は病人ばかりといった年もあった」。そして、「冬奉公人も、次第に冬季に限らず、年間を通して、出稼ぎ先の江戸や関東各地にそのまま残り、帰村しない者が多くなっていた」。

このように、人口増大の続く日本海側の豪雪地帯から太平洋側の地域へ冬季に労働に来ていた者が、次第にそのままその土地に定着していく様子が描かれている。また、越後国の者を対象として、人口移動が政策的に行われた場合もあった。

たとえば、天明期から寛政期には、白河藩領内の村へ、藩主松平定信によって、越

後国の女性が百姓の嫁として迎えられた⁽⁴¹⁾。このような越後国から白河藩領への人口移入は、すでに寛保元年（一七四一）にも行われており⁽⁴²⁾、これは、当時藩主であった松平定賢が越後国高田より白河に入封した直後のことであり、両地方の関係は深かったと考えられる。

さらに、享保年間以後、人口が急激に減少していた常陸・下野の両国にも、越後国からの農民移住策がとられた。「この移住策は、一家全員を荒廃農村に移住させ、農業の再興、ひいては農村の再興を図ろうとしたものであった。北関東への移住民は、頸城地方⁽⁴³⁾では寛政七年（一七九五）〜文化四年（一八〇七）までの一二年間に、三四二戸、一七〇〇人にも上った⁽⁴⁴⁾」。会津でも、越後国からの移住を計画的に行った。このような人口の移動が行われた背景には、越後国春日山城主であった上杉景勝が慶長三年（一五九八）に会津に移封されたことにより両地域につながりができていたことが考えられる。

越後国は会津や白河と地理的にも近く峠を越えれば往来可能であり、また、領主の移封も行われた。さらに会津や白河は越後国内に預所を所有していた。特に後に見る東蒲原郡⁽⁴⁶⁾は越後国と会津の境界に当たり、明治初期には福島県に含まれていた。白河（一六二七年以前）も二本松（一六四三年以前）も、かつては会津の支配下にあり、また初代二本松藩主の丹羽光重は白河より国替で移封となった。このように、越後国と陸奥国南部との政治地理的な関係は深かった。

他国への流出人口が多いという越後国の特殊性は、人口の墮胎・間引きといった人為的制限がこの地域で多くの信者を得ていた浄土真宗で禁止されていたために人口圧が高くなったからという説もある⁽⁴⁷⁾が、この点に関してはさらに調べてみたい。

3-4-2 流入理由

郡山へは、多くの人々が他の地域から流入した。郡山が持つ人口を引き付ける要因

は何だったのか。第一に考えられるのは、「労働需要」の高さである。宿場町であり商業都市であり地方の政治の中心ともなっていた郡山に、周辺農村からも多くの人々が働きに来ていたことは前節で述べたとおりである。郡山上町への流入を理由別に観察すると、何といっても第一に多い流入理由は「奉公」によるものである（表2）。

ところが、奉公人比率⁽⁴⁸⁾をとってみると初期の頃は男子と女子とで同程度であったのが、町場の発展に伴って一七九〇年あたりから、女子の奉公人比率が高くなる（図13）。そして、出身地域で見ると、男子の奉公人の場合は周辺農村（脇村）からの者が多いが、女子の奉公人は越後国蒲原郡を中心とする「他所より」の者が多い。逆に、越後国蒲原郡などの「他所より」からの男子奉公人はほとんど存在しない（図14）。

労働需要の高さから都市に集まってくるのは、奉公人ばかりではない。「引越」でやってくる者もその動機が労働需要による場合が多い。越後国からは、「永引越」で

表2 郡山上町への理由別移動 (1729~1870)

理由	流入	流出	純移動
引越	1844	315	1529
厄介など	726	149	577
養子・養女	1241	700	541
結婚	1558	1050	508
奉公・仕事	5206	4864	342
店借	667	660	7
欠落・行方不明	0	1773	-1773
その他・不明	385	100	285
計	11627	9611	2016

家族とともにやってくる者も多い。⁽⁴⁹⁾
 そして、引越でやってきた人々のところ
 数年後にまた越後国から人が流入して
 くる場合も見られる。都市への流入人口を考
 える場合、これらの人々が都市の下層階級を形
 作ったのか、ということがしばしば問題にさ
 れる。郡山上町では、これらの流入人口は、
 町の大商人や名主のところに行ったり、中
 大工として働いたり、さまざまである。

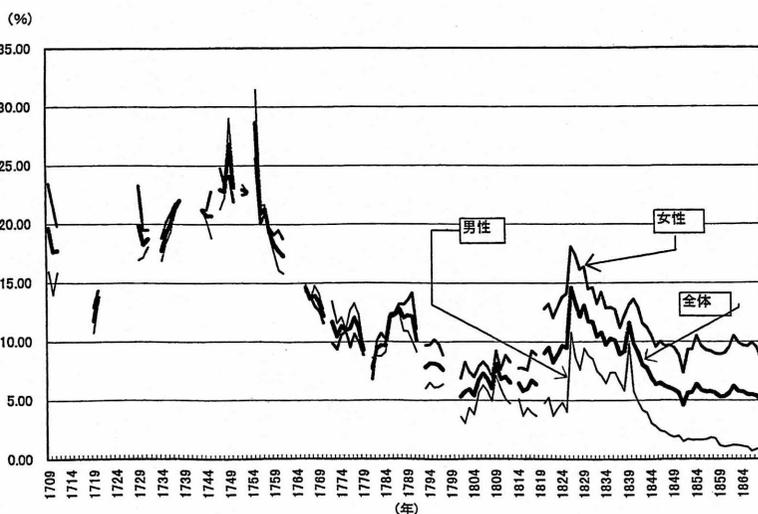


図13 奉公人比率 (帳末記載：奉公人/定有人)

には自身が大商人になる者もあれば、欠落
 人となり行方不明になってしまう場合もあ
 る。まさに、都市に出てくることによっ
 て、人生が大きく変化するという現象が観
 察

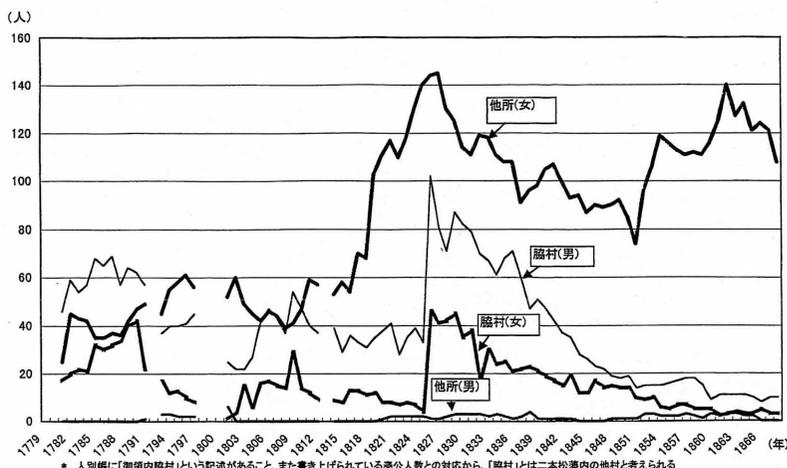


図14 奉公人出身元別趨勢 (帳末記載)

される。⁽⁵⁰⁾
 奉公人として、郡山上町にやってくる者
 は確かに多い。だが、彼らのほとんどが年
 季奉公人であり、年季が明けると出身地

帰ったり、また、中には身請けされて近隣地域に移る場合もある。このことから、入り奉公人の郡山上町の人口増加への寄与率は必ずしも高いとは言えない。何といっても郡山の人口増加に大きな貢献をしたのは、越後国からの「引越」による流入者である。このような引越世帯は人別帳では「水呑⁽⁵¹⁾」と記載された。また、一八〇〇年あたりから、主として越後国からの「厄介」と記載される流入が始まり、一八三〇年あたりからこれが「引越」と同程度見られるようになる。「厄介」は、すでに存在する世帯内部への流入であり、引越先の世帯員との続柄が「厄介」と記入される場合である。一人で流入する場合もあれば家族ごと「厄介」として流入する場合もある。これは、郡山上町において、すでに十二分に町域がひろがり、新たに居住する場所が確保できなかったことを意味するのだろうか。⁽⁵²⁾あるいは、流入先世帯の親戚筋の者が「厄介」として同居をするということが多く行われるようになったのだろうか。

たとえば、郡山上町のある水呑の家の職業は「仕立屋」であるが、ここに「厄介」が入ってくる。この場合では、「厄介」はこの家で労働を分担する奉公人である可能性も高い。いずれにせよ、「厄介」が何を意味するかに関しては、それぞれがたどった具体例や他の史料などから、より詳細に検討する必要がある。

郡山上町への絶え間ない人口流入の理由として次に考えたいのが、「城下町の衰退」である。城下町が労働力を引き付ける力を失ったことが在郷町の発展につながった可能性があると前述した。それでは、城下町二本松の様子はどのようであったのか。たとえば、城下町は商業などの規制が強固であったのに在郷町では弱く、そのことが郡山における商業を活発にしたのだろうか。一八世紀初頭の二本松は城下町として領内の政治・経済の中心と同時に全国商品流通の結節点として繁栄していた。延享三年(二七四六)の家数は六七〇軒余、天明八年(一七八八)には家数七二三軒、総人数

三一一人(内、男一七一人、女一四〇七人)と増加傾向にあった。⁽⁵³⁾

しかし、やがて藩の財政窮迫から、藩に結びついた特権城下町商人による商業活動が不振となる。そして、二本松城下町経済は停滞する。これと反比例して郡山・本宮・小浜などの新興宿駅商人が勃興する。財政的に窮乏した二本松藩も、旧来城下町商人が持っていた肴株・塩株などの特権を与えることによって、新興商人層に財源を求めようになる。このようにして、宝暦・明和期(二七五一〜一七七二)頃には新興商人が「人帳除き」といった地位や家守制をとれるようになってくる。⁽⁵⁴⁾そして、これらの新興商人は上方や関東地方とも結びつき活発に商売を行うようになる。⁽⁵⁵⁾確かに、郡山上町の繁栄も城下町経済の停滞と結びついたものであったといえる。このように商業的発展により人口流入が生じていた郡山では、宿場特有の事件も生じ、それが記録にも残されている。⁽⁵⁶⁾人口の絶え間ない流入が町の風紀を乱した可能性

もある。郡山では町場昇格とともに木戸が創設されたが、このことによって夜間の人口流入を防ぎ、町の治安維持に努めたのかもたれない。

4 他地域との比較

ここでは、近世における在郷町の人口増加ということに関連して簡単に他の在郷町の事象について触れておきたい。摂津国富田林は、寺内町から在郷町となったところだが、寛永二十一年（一六四四）と貞享三年（二六八六）の宗門帳を比較すると、近村からの人口流入が行われたため、戸数の増加が著しい。これは、高持ち層においても若干増加しているが、やはり借屋層の増加が著しい⁵⁷⁾。また、武蔵国粕壁宿は宿場町であり、分家と流入者から、寛文から元禄期には宿場町の戸口が増大している。また、同地域の人口は延宝八年（一六八〇）の一三三六人が享保一八年（一七三三）には三五四四人となっている⁵⁸⁾。さらに、上野国桐生においても機織労働需要のため、宝暦七

年（一七五七）〜安政二年（一八五五）にかけて人口が三倍になっているという現象が観察されている⁵⁹⁾。

このように、時期は若干異なるが、在郷町における人口増加は、近世日本の多くの地域で観察される現象といえる。

5 まとめ

郡山上町では、人口の流入の相手先第一位は当然のことながら郡山下町である。

次に郡山組、そして他の安積郡内や安達郡内の農村が多い。また、越後国からの流入が多い（図15）。しかしながら、地域により流入の理由がかなり異なることも同時に観察された。奉公には近隣農村からも越後国などの「他所」からもやってくるが、その内容はかなり異なる。近隣農村からは男子が働きにくるが、これに対して越後国などからの奉公は女子が多い。つまり、越後国などから奉公にやってくる女子は年齢的にも「飯盛女」として働きに来ていたと考えられる（表3）。奉公による流入者は

やがて再び流出することが多い。近隣農村からは「店借」でやってくる者や「結婚・養子」などの理由で流入する者も多く、郡山上町からも同様の理由でこれらの農村地域に流出する。越後国からは奉公のほか「引越」・「厄介」で家族とともにやってくる者が多く、これが郡山上町の人口増加に大きく貢献していた（図16）。

人口増加に関し、一八〇〇年頃から、自然増加・社会増加ともに変化が生ずる。社会増加に関しては流入理由など「厄介」が目立ってくるというような変化が見られた。また、観測期間の初めは人口増加への寄与という点で、社会増加が正、自然増加が負であったのが、やがて社会増加が正、自然増加も正へと変化した。このことによって、人口が急速に増加する傾向が見られる。この自然増加の負から正への変化は粗出生率の上昇による。また、乳児死亡率が低くなったということもあり得る。粗出生率の上昇に関しては、近隣農村でも同様の現象が見られた。このようなことの原因として生

活環境の改善、たとえば働きながら、夫婦で暮らせるようになったのではないか、といったことが考えられる⁽⁶⁰⁾。

最後に、はじめに提起した二つの説に関して今回の分析から考えられる範囲での回答をしておきたい。

まず、「都市蟻地獄説」に関して考えてい。在郷(宿場)町であった郡山上町は確かに外部からの人口を引きつけた。しかし

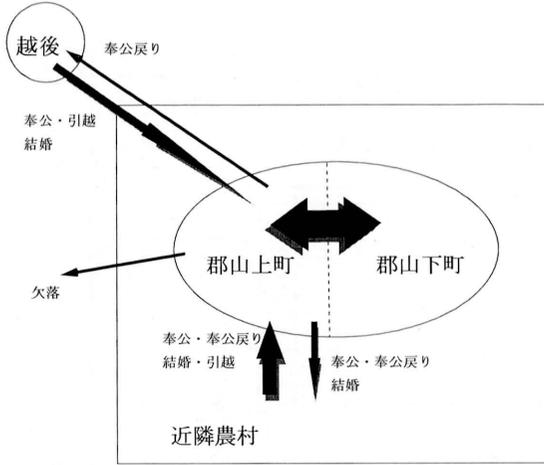


図15 移動の方向

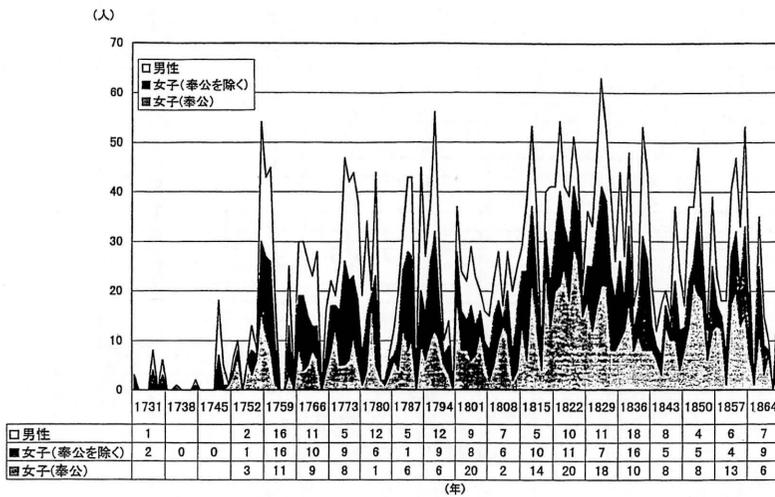


図16 越後からの流入

ながら、その粗出生率や粗死亡率は周辺農村と比較して特に低いとも高いともいえない。有配偶率や有配偶出生率などのより詳細な人口指標をもって検討する必要がある

が、農村的要素がある郡山上町に関する限り、都市蟻地獄説は、社会増加に関する(流入人口が多かった)点のみ妥当であるといえる。

次に「プロト工業化論」である。すでに斎藤(一九八五)によって指摘されていることであるが、ヨーロッパのプロト工業化論をそのまま近世日本に当てはめることはできない。しかし、郡山上町は、本格的な工業化以前に農村から都市的要素を多く含む町場へ変わった。郡山上町では大商人の出現や、その資本を元にした周辺村落での養蚕・製糸業の発展もみられた。このような郡山とその周辺農村の経済の向上が幕末期にかけての粗出生率の上昇に結びついたのかもしれない。

今回の分析の結果、これから調査しなければならぬ課題がいくつも残った。人口増加の背景について以下のような原因が考えられる。(1)町場昇格が生じ、宿場町として繁栄した⁽⁶¹⁾。(2)経済的には、大槻組・片平組・郡山組の三組の貢納蔵が

表3 越後からの理由別流入（主な理由である6ケースについて）

年齢*	女性							男性							総計	
	引越	掛人・厄介・抱	結婚	同居	奉公	養子・養女	計	引越	掛人・厄介・抱	結婚	同居	奉公	養子・養女	計		
0	1	1	1			1	4			1				1	5	
1	12	5	10			2	29	21	5	5	2		5	38	67	
2	7	7	3	3		2	22	12	5	4			2	23	45	
3	9	4	3	1		1	18	11	5	2			1	19	37	
4	22	5	5	3		4	39	17	6	1			2	26	65	
5	11	5	1	1	1		19	10	5	1			1	17	36	
6	7	1	3		4	1	16	10	4	1				15	31	
7	12	4	1		14	1	32	19	3	1			1	24	56	
8	13	2	2	1	27	2	47	8	2	1			3	14	61	
9	5	4	1	1	14	1	26	3	4	1	2			10	36	
10	13	4	1		34		52	5	3		1			9	61	
11	6	1	2	3	33	3	48	9				2		2	13	61
12	10	1	1		43	1	56	14	5	1	2			22	78	
13	5	3			82	2	92	8	2			4	2	16	108	
14	6	3	3		120	2	134	11	2			2		15	149	
15	10	5	3	2	131		151	4	2	1		3	1	11	162	
16	5	5		2	145	3	160	11	6	1	3	3	1	25	185	
17	5	4	6	2	124	2	143	2		1	1	1		5	148	
18	3	2	5	3	116	2	131	6	4				4	14	145	
19	4	5	5	1	76		91	8	3		2		3	16	107	
20	1	3	6	2	40	5	57	6	3			1	4	14	71	
21	10	5	7	2	31	2	57	5	4		3	1	4	17	74	
22	8	8	12	6	23	2	59	11	2	3	1		6	23	82	
23	4	5	12	1	9	2	33	6	2	3			6	17	50	
24	20	12	13	1	2	3	51	5	5	1	6		17	34	85	
25	6	9	12	1		1	29	11	6		3		15	35	64	
26	17	9	9	1	6		42	6	6		3		12	27	69	
27	8	9	14	3		2	36	12	3		5		16	36	72	
28	6	11	1	1		4	23	6	7		1		9	23	46	
29	12	8	7		1	2	30	15	10		4		10	39	69	
30	8	2	6	1	1	2	20	7	7		4		3	21	41	
31	8	8	7	1	3	1	28	18	5		5		8	36	64	
32	8	2	7	1		1	19	5	10		2		5	22	41	
33	9	7	2				18	11	3		4	1	2	21	39	
34	18	10	7		2		37	16	15		3		8	42	79	
35	13	3	3				19	14	5		3		3	25	44	
36	10	3	7	1			21	15	4		7		4	30	51	
37	15	3	3	2		1	24	20	9		1		2	32	56	
38	6	6					12	15	4		1		3	23	35	
39	8	2	8	2			20	25	7		1		8	41	61	
40	7	2	1	1		1	12	13	3		1		3	20	32	
41	8	1	1	1	1		12	9	3		1		5	18	30	
42	7		2	1	1		11	8	2		1		5	16	27	
43	4		1				5	9	2		1		3	15	20	
44	10	1	1	1			13	13	2		2		3	20	33	
45	3	1	1			1	6	7			1		1	9	15	
46	5	4	1				10	10						10	20	
47	6	1	2				9	12	6				3	21	30	
48	3	2	1				6	6	1					7	13	
49	7	1	3		1		12	3	2	1	2		1	9	21	
50	4		4	1			9	5	1					6	15	
51	2		1				3	4	2	1			1	8	11	
52	6		1		1		8	6	2		2		1	11	19	
53	3		1	1			5	5	1		2		2	10	15	
54	5	1	1	1			8	11			2			13	21	
55	4			1			5	10			2			12	17	
56		1					1	9	2				1	14	15	
57	1		2	1			4	5			1			6	10	
58								3	1		2			6	6	
59	2			1			3	3	1					4	7	
60	3	1		1		1	6	3					1	4	10	
61	1						1	2	1					3	4	
62	4	3					7	1			3			4	11	
63	1	1		1			3	2						2	5	
64	1	1					2	4	1		1			6	8	
65	2						2		1					1	3	
66	1						1				1			1	2	
67	2			1			3	1						1	4	
68								1						1	1	
69				2			2	2						2	4	
70			1				1							1	1	
71								1						1	1	
73	1						1	1						1	2	
75				2			2							2	2	
77	1						1							1	1	
85								1						1	1	
86				1			1	1						1	2	
総計	465	217	223	68	1086	61	2120	589	217	23	103	20	203	1155	3275	

*ここでの年齢は、人別帳の記載年齢から1を引いたものである。

おかれ、定期市が立ち商業活動が活発となっていた。(3) 政治的には農村支配のための代官所がおかれていた。これらの果たした役割をひとつひとつ、できうる限り実証的に確認する必要がある。

さらに、郡山上町における人口増加の最大の要因となっていた越後国からの流入者に関して、なぜ彼らが流入したのかについてより詳細に検討しなければならない⁽¹²⁾。流入者は、その後どうなったのか、彼らの生活・人口的な指標は以前からの居住者と異なっていたか。また、今回はほとんど行えなかった他の宿場町との比較、宿場町以外の町との比較も将来的には試みたい課題である。

このような中から、日本近世の在郷町の性格に関しての共通点と特殊性を導き出したい、と考えている。

注

(1) 移動者が直接衰退下の城下町から成長

下の在郷町へ行ったというような単純なものではなく、実際の移動のパターンはもっと複雑なものであった(スミス(一九九二)二八頁)。

(2) 在郷町とは、支配関係からは農村に位置づけられるが、機能としては町場であった地域で、港湾都市や宿場町などがあった。

(3) スミス(一九七三、七七、八五)は、三五の城下町所属平民人口の変化(二七〇〇〜一八五〇)から、一八世紀以降、数多くの城下町が人口減少を経験したことを明らかにした。そしてその人口減少を、西欧における大都市を中心とした間断なき都市成長と対比させ、その相違を外国貿易の有無に求めた。齋藤(一九八七)にも、この点に関する言及がある。

(4) 近世の都市人口に関する分析として、

佐々木(一九六七、七七、八八)、速水

(一九七五、八一、八二、九〇a、九〇b)、

深井(一九七七)、鬼頭(一九八三)、齋藤

(一九八七)、酒井(一九八三)、高木(一九八九)などがある。

(5) 何を基準として都市と考えるべきかは、第2節において論じる。

(6) 速水(一九七五、九〇)など。

(7) 都市墓場説(urban graveyard theory)ともいう。速水(一九七五)、佐々木(一九七七)参照。

(8) 齋藤(一九八七)。

(9) SHARLIN (1978)。

(10) 齋藤(一九八五、八七)。

(11) 齋藤(一九八七)二〇頁。

(12) 郡山下町の人別帳が連続して残存し始める年。

(13) 一八七〇年は史料の記載様式が若干変化するため、同一の記載様式である最終年の一八六七年の値をとった。

(14) この数値は、上町・下町ともに帳末の総人口である。

(15) 二本松藩では領内一〇カ村を一〇組として、それぞれに代官を置いていた(郡山市史編(一九七二)七五八―八二頁)。

(16) 二本松市編(一九八二)一五二頁。

(17) 内書のみでは、一五三九人。また、一八〇一年人別帳の帳末数字では、定有人は一四九六人。

(18) ここでの数値は、史料末尾の総人口。また、郡山下町は享和元年(一八〇一)の史料が得られないため、寛政二年(一八〇〇)の数値を記した。

(19) 本町、亀谷町、竹田町、松岡町、根崎町、若宮町。

(20) 二本松城下の詳しい人口趨勢を得る手がかりは今のところ見つからない。天明八年(一七八八)の記録は「陸市漫録」〔天明八年六町惣家数人数惣高寛〕が書かれている一次史料の表題。二本松市編(一九八二)三三三―三三八頁に収録。個人蔵による。また、これ以前では、「勿他見集」(同様に一次史料。二本松市編(一九八二)九一〇頁に言及がある)に宝永二年(一七〇五)の城下惣町人数四五四三人という記述がある。

(21) 都市の人口規模として一万人あたりを妥当とする考えもある。De VRIES(一七八四)では、便宜的に都市人口を一万人とされている。しかし、これが都市の定義ではないことを彼は強調しており、近代の都市として妥当な水準は少なくとも二〇〇〇人〜三〇〇〇人の人口を持つところだが、このような都市に関する情報を収集するのが困難なところから一万人を用いていると断っている。

(22) 渡辺浩一(一九九二)一八九頁。

(23) 成松(一九八五)一一三頁。

(24) 一六八八〜一八七〇年まで残存。そのうち欠年は、一六九〇〜一六九三、一六九六〜一七〇八、一七一一、一七一三、一七一五〜一七二八、一七二一〜一七二三、一七二五〜一七二八、一七三二、一七三三、一七三九、一七四二、一七四三、一七四六、一七五一、一七五四、一七六二、一七六三、一七六五、一七七二、一七八四(一部残存)、一七九二、一八〇〇、一八一九、一八六五、一八六九、一八七〇(一部残存)の四九年。帳面作成月は三月であることが多い。

(25) 現在の福島県郡山市の一部である。
(26) このほか、丹羽光重が二本松へ国替になった時に田村郡三〇カ村が預かり地となった。この地は寛永二〇年(一六四三)から延宝六年(一六七八)年まで二本松藩領として支配下にあった。また、天保四年(二八三三)二月に湖南地方の館・横沢・安佐野・舟津・浜路が幕領川俣陣屋支配に移され、その替地として信夫郡八丁目村・鼓岡・天明根・上水原・下水原の五カ村が二本松領に組み入れられた。その他、享保一五年(一七三〇)から寛保二年(一七四二)まで、信夫・伊達の幕領五万石を支配

し、安政五年(一八五八)から慶応三年(一八六七)まで上総国富津砲台警備として、同地周辺君津郡内に二万石を預けられ、支配していた(郡山市編(一九七二)七五―七九頁)。

(27) 寛永二〇年(一六四三)の記録では郡山組・本宮組が郡山本宮組として一つになっているが、慶安元年(一六四八)の記録では郡山組と本宮組は分離している。しかし、八山田・荒井の二カ村はまだ入っていない(郡山市編(一九七二)八〇―八二頁)。また、「積達大概録」(一次史料。個人蔵。二本松市編(一九八二)八七三―八七四頁)では、郡山組拾参箇村として笹川以外の村が書き上げられている。

(28) 速水(一九八二)。
(29) 経済的に苦しくなって他地域へ移動するなど、何らかの理由でいなくなった(「穴落した」者。数年経って戻ってくる者もあれば、そのまま戻らない者もあるが、郡山の人が別帳上にはかなり長い期間にわたって書き上げられている。また、「穴落人の覚え」は、別帳に作成される場合もある。

(30) 二本松藩では財政逼迫のため、金銭的対価によりこのような身分を付与していた。

一般の人々とともに人別帳に記載されなくなったこれらの人々は「人帳除きの者」として、史料末尾に記載されている。

(31) 「店借」による流入は周辺地域からの者のみである。

(32) 郡山市編(一九六五)四二頁。

(33) 成松(一九八五)一一二―一三頁。

(34) 成松(一九九二)七八頁。下線は筆者。

(35) 成松(一九九二)九二頁。

(36) ここでは、「食売女」と呼ばれているが、「飯盛女」と同義であり、宿場特有の女性労働のことである。

(37) 酒井(一九八三)。

(38) 新潟県編(一九八八)二四四―二五二頁。

(39) 現在は巻町に属する。

(40) 速水(一九九三)一五八―一六一頁第3表 幕府調査国別人口表を参照のこと。

(41) 中村(一九六七)。

(42) 温故談話会編(一九七七)八頁。

(43) 松平定賢は定信の二代前の白河領主。

(44) 越後国頸城郡。越後国西側に位置していた。

(45) 中村(一九六七)に言及がある。

(46) 明治二年(一八七九)、郡区制施行

により蒲原郡が分かれ、一部が東蒲原郡となった。

(47) 越後に多い真宗門徒は墮胎・間引きの風習になじまなかったと言われる(新潟県編(一九八八)二五〇頁)。

(48) ここで使用する数値は、人別帳末尾に記載された奉公人数を同末尾の定有人数で除いたものである。

(49) この理由として、新発田藩では、「他国稼」は許されていなかったが、「引越」という形態をとっての他国稼は許可されやすかったという指摘がある(本間(一九六三))。

(50) 今回、分析の対象としているのは、人別帳に記載されている人口である。したがって、人別帳に記載されないより下層の人々も流入してきた可能性があるが、ここでは考慮していない。

(51) 一般的には「水呑」とは、土地を所有しない百姓のことである。土地を所有しないために役負担を負わないが、そのためにその土地の正式な構成員とはみなされない。しかしながら、特に町場の場合には商業活動が活発であるので「水呑」が、土地を保有しないことによってすなわち貧しい人々

とは言えない。郡山の場合には引越して流入してきた当初は「水呑」であるが、やがて郡山に定住し、借高なども持つようになると、「高持」と記されるようになる。この時点で郡山の正式な構成員とみなされるようになったと考えられる。

(52) 町場域の拡大については、渡辺浩一が次のように述べている。「貞一文書(郡山歴史資料館所蔵「今泉文書」)によれば、郡山は、「一八世紀の末ごろから、裏町の人口増と新たな裏町の成立が著しいというのである。つまり、近世後期になって水呑・店借層の増加によって急激に戸口が増大し、その社会構造も都市的色彩を強めるという、関東など他地域で一般的に見られる在郷町・宿場町の典型的なタイプといえるだろう」(渡辺(一九九二)一八八頁)。

(53) 福島県編(一九七〇)七九二頁。しかしながら、天明八年の六町総家数は「陸市漫録」では、かっこつきながら七四一軒とになっている。これは、本町人口として一五三軒を考えるのか、通町(二二〇)・馬場丁(二六)・柵橋(二六)・栗ヶ柵(七)・久保町(二)の合計である一七一軒をとるのかによって異なるようである(二本松市

編(一九八二)三三三―三三八頁。

(54) 「郡山における家守の格式を得た数は明和三年(一七六六)以降明治維新までの間に、上町一三人、下町七人の計二〇人で、そのほか上納金の回数・金額により郷土、城下町年寄、検断格や並(筆者注・検断格並ということ)の資格を得た商人が少なくない。彼らは近世中期以降幕藩制下の最大の資本である土地を集積する方向をたどった。」(福島県編(一九七〇)八六〇頁)。

(55) 「呉服などの取引は、名古屋・京都の方まで広く行われ、蚕は群馬方面へも買入れ中継ぎを行った。魚屋は二本松・須賀川に劣っていたが、幕末には直接、浜と取り引きするようになった。また、職業別に仲間組をつくり、商業の統制も行われた。」(郡山市教育委員会編(一九六五)六一―六二頁)。

(56) 盗難一七件、傷害一三件、喧嘩五件、死亡一八件などが記録されている(郡山市編(一九七一)二二二頁)。

(57) 脇田(一九九四)九四頁。

(58) 深井(一九九〇)一二六頁。

(59) スミス(一九八五)二八頁。

(60) フランドル・モデルにおいて提起され

たようなプロト工業化期に観察された結婚年齢の低下による出生率の上昇という概念は、ここではすでに女子の結婚年齢が十分に低いために当てはまらない。

(61) 郡山宿の賑わいぶりに関して、「参勤交代の大名行列などは、時間を調節して、須賀川・本宮に泊る予定を変更し、郡山に泊ることを望んだとも記され、立て混んで本宮・須賀川に進んだり、戻されたりすることの不愉快さを書いた日記なども見られる」との記述がある(郡山市編(一九七四)一五一頁)。

(62) 不漁や洪水などの飢饉や災害のために暮らしが成り立たなくなったものが流出すると考えられている。

* 本報告で用いたデータは、「安積郡郡山上町人別帳」を元に速水融先生により作られた XAVIER を用いている。両氏とともに、データを史料から利用可能な形に書き写してくださった成松佐恵子氏、および史料を快く利用させてくださった郡山市歴史資料館の伊藤堯信元館長に感謝している。また、一部の図表作成にあたって谷田部弘

美さんの助けをおかりした。

参考文献

中部よし子(一九七八)『城下町』柳原書店。
De VRIES, Jan(一九八四), *European Urbanization 1500-1800*, Methuen & Co. Ltd (London).

深井甚三(一九七七)「近世中期の城下町人口動態について―信州上田城下町の場合―」『日本文化研究所研究報告・別巻』(東北大学文学部日本文化研究所)、六三―一九〇頁。

深井甚三(一九九〇)『宿と町』高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅱ』東京大学出版会、一二五―一四三頁。

深井甚三(一九九四)『幕藩制下陸上交通の研究』吉川弘文館。

福島県編(一九七〇)『福島県史 第3巻 近世2』巖南堂書店。

芳賀登(一九七七)『宿場町』柳原書店。

速水融(一九七五)「近世後期地域別人口変動と都市人口比率の関連」『研究紀要』(徳川林政史研究所)、昭和四九年度、二二〇―二四四頁。

速水融(一九八一)『京都町方の宗門改帳―

四條立売中之町―『研究紀要』(徳川林政史研究所)、昭和五五年度、五〇二―五四一頁。

速水融(一九八二)「近世奥羽地方人口の史的研究序論」『三田学会雑誌』(慶應義塾大学経済学会) 75巻3号、七〇―九二頁。

速水融(一九九〇a)「近世奈良東向北町の歴史人口学」『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要) 第3集、一一―三三頁。

速水融(一九九〇b)「近世都市の歴史人口学的観察―奈良東向北町・寛政五年〜明治五年―」『三田学会雑誌』(慶應義塾大学経済学会) 82巻 特別号―II、一五六―一七五頁。

速水融(一九九三)「明治前期人口統計史年表―附幕府国別人口表―」『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要) 第9集、一三五―一六四頁。

平凡社地方資料センター編(一九九三)『福島県の地名(日本歴史地名体系7)』平凡社。

昼田源四郎(一九八五)『疫病と狐憑き』みすず書房。

本間哲朗(一九六三)「新発田藩の他国稼について―新発田領大久保新田に見る―」

『史学論考』(新潟大学教育学部歴史科談話会)、第10号、二七―三四頁。

原田敏丸(一九七〇)「近世宿駅の村落構造―主として中山道柏原宿の譜代関係について―」『日本歴史』(日本歴史学会) 265号、三〇―四七頁。

入交好脩(一九七七)『幕末の特権商人と在郷商人』創文社。

川口洋(一九九四)「宝暦五(一七五五)年の越後国魚沼南部における村落人口」『経済経営研究』(帝塚山大学)、第2号、七三―七八頁。

KAWAGUCHI, Hiroshi (1993), 'Long Distance Marriage in North East JAPAN (1750~1880)', *Tezukayama University Faculty of Economics Discussion Paper Series*, No.056, pp.1-17.

菊池喜久康(一九九三)「街道と宿場と色と(その一)」『史楽』(郡山市役所史楽会) 14号、一四―二二頁。

木村礎改訂(一九七九)『旧高田領取調帳東北編』近藤出版社(復刊:一九九五東京堂出版)。

鬼頭宏(一九八三)『日本二千年の人口史』PHP研究所。

小林清治・山田舜(一九七〇)『福島県の歴史』山川出版社。

郡山市編(一九七四)『郡山の歴史』郡山市。郡山市編(一九七二)『郡山市史 第二巻 近世(上)』国書刊行会。

郡山市編(一九七二)『郡山市史 第三巻 近世(下)』国書刊行会。郡山市教育委員会編(一九六五)『郡山の歴史』郡山市。

草野喜久(一九七六)「郡山宿の食売女について―女性史の一断面―」『史楽』(郡山市役所史楽会) 5号、三一―一頁。

草野喜久(一九七九)「郡山宿の食売女について(2)―女性史の一断面―」『史楽』(郡山市役所史楽会) 6・7合併号、七一―五頁。

草野喜久(一九九五)「近世郡山地方研究論集」郡山共同印刷。

丸山雍成(一九七五a)「近世宿駅の基礎的研究一」吉川弘文館。

丸山雍成(一九七五b)「近世宿駅の基礎的研究二」吉川弘文館。

丸山雍成編(一九九二)『日本の近世6 情報と交通』中央公論社。児玉幸多編(一九九二)『日本交通史』吉川

弘文館。

森田武(一九七六)「在郷町における階層構成の特質と矛盾関係」『埼玉大学紀要』(教育学部)第25巻、七七―九八頁。

中村辛一(一九六七)「越後の出百姓について」中村辛一編『高田藩制史研究』第6巻、風間書房、五三二―五五三頁。

成松佐恵子(一九八五)『近世東北農村の人々』ミネルヴァ書房。

成松佐恵子(一九九二)『江戸時代の東北農村』同文館出版。

新潟県編(一九八八)『新潟県史 通史編4 近世II』新潟県史印刷共同企業体。

二本松市編(一九八二)『二本松市史6 資料編4 近世III』二本松市。

西川幸治(一九七二)『日本都市史研究』日本放送出版協会。

温故談話会編(一九七七)『越後地誌風俗全書 越後風俗志(全)』歴史図書社版(原典は一八九五年の刊行)。

小野晃嗣(一九九三)『近世城下町への研究』法政大学出版局。

齋藤修(一九八五)『プロト工業化の時代』日本評論社。

齋藤修(一九八七)『商家の世界・裏店の世

界』リブポート。

酒井守(一九八三)『幕末期における江戸近在宿の人口動態―武蔵国埼玉郡粕壁宿の場合―』関東図書株式会社。

佐々木陽一郎(一九六七)『徳川時代後期都市人口の研究』撰津国西成郡天王寺村『史海』(東京学芸大学史学会編)、第14号、三一―四四頁。

佐々木陽一郎(一九七七)『江戸時代都市人口維持能力について―飛騨高山の経験値にめぐり―実験の結果』社会経済史学会『新しい江戸時代史像を求めてその社会経済史的接近』東洋経済新報社、一三五―一五二頁。

佐々木陽一郎(一九八八)「人口移動とその要因―飛騨国と高山の実例―」『千葉大学経済研究』第2巻第2号、三七―七四頁。

SHARLIN, Allan (1978) 'Natural Decrease in Early Modern Cities: A Reconsideration', *Past and Present*, no. 79, pp.126-138.

庄司吉之助(一九七一)『旅籠屋と飯盛女』『福島史学研究』(福島県史学会)第12号、二九―四二頁(庄司吉之助(一九八三)『福島の民族と伝承』庄司吉之助著作集5、歴史春秋社、三五四―三六九頁、に再録)。

SMITH, Thomas. C. (1973, 77, 95), 'Pre-modern Economic Growth Japan and the West', *Past and Present*, no. 60, 邦訳(一九七七)『前近代の経済成長―日本と西欧』

社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めてその社会経済史的接近』東洋経済新報社、一五三―一九二頁。同(一九九五)『前近代経済成長―西洋と日本―』トマス・C・スミス/大島真理夫訳『日本社会史における伝統と創造―工業化の内在的諸要因一七五〇―一九二〇年―』ミネルヴァ書房、一八―五四頁。

菅野与(一九八五)『近世村落構造の研究―二本松藩仁井田村人別帳の分析―』小林清治先生還暦記念会『福島地方史の展開』名著出版、四二―四七九頁。

高木正朗(一九八九)『都市町内の Population Dynamics―一九世紀奈良町』人数増減帳』に見る』『立命館産業社会論集』(立命館大学産業社会学会)、第25巻第1号、一六七―一九二頁。

高橋康夫・吉田伸之(一九九〇)『日本都市史入門III』東京大学出版会。

田中喜男(一九八六)『幕藩制都市の研究』文献出版。

脇田修（一九九四）『日本近世都市史の研究』

東京大学出版会。

渡辺和敏（一九八五）「宿場町の住民生活」

『愛知大学総合郷土研究所紀要』（愛知大学総合郷土研究所）三〇号、一〇九―一三五頁。

渡辺和敏（一九九二）『近世交通制度の研究』

吉川弘文館。

渡辺浩一（一九八九）「近世後期における在

郷町共同体と藩権力——文政七年郡山町昇格を巡って」『日本文化研究所研究報告』

（東北大学文学部日本文化研究所）別巻第

26集、八五―一〇一頁。

渡辺浩一（一九九二）「在郷町における町年

寄・若者仲間・祭礼」渡辺信夫編『近世日

本の都市と交通』河出書房新社、一八七―

二〇六頁。

山田安彦・山崎謹哉編（一九八九）『歴史の

古い都市群・3―東北地方太平洋側の都市

―』大明堂。

柳田和久（一九七九）「二本松藩の領内支配

について」『郡山地方史研究』一四六―一六

三頁。

柳田和久（一九八三a）「奥州安積郡郡山に

生きた飯盛奉公人について（1）」『地誌と

歴史』三三、三五頁。

柳田和久（一九八三b）「奥州安積郡郡山に

生きた飯盛奉公人について（続）」『地誌と

歴史』三四、三五頁。